

「これからのバイスタンダー育成」

神奈川県 代表

横須賀市消防局

山口 真生子

目撃のある心肺停止の傷病者のうち、バイスタンダーCPRが実施された割合は約58%。半数を超える傷病者に市民からの救いの手が差し伸べられた一方、傷病者全員に処置がなされていないということも読み取れます。なぜ、応急手当を躊躇ってしまうのか。そして我々消防職員は今後どのような普及活動をするべきか、私の実体験をもとに、意見を述べたいと思います。

数年前、私は外出中に目の前の男性が突然倒れ、心肺停止に陥っている現場に遭遇しました。男性に手を差し伸べた瞬間、全身が痺れるような、強い緊張感に襲われました。

「自分が動かなくては、この人は死んでしまう。」そんな思いを抱え無我夢中で男性の胸を押ししました。周囲のざわめき、まだ体温の残る男性の胸の肌の感触、電気ショックをした時の一瞬の痙攣。あの時の光景を忘れることはできません。男性がその場で息を吹き返した時、心の底から安堵したことを今でも鮮明に覚えています。その後到着した救急隊に搬送されていく男性の姿を見送ったとき、ようやく体の感覚が戻るとともに、「自分があの男性の命をつないだのだ。」という実感を噛み締めました。

私は救急救命士として救急業務に携わり、多くの命の現場を経験してきました。しかし救急隊の到着を待つ市民の立場に立った時、これほど心細く、不安や恐怖心で押し潰されそうになるということを痛感しました。そして、このバイスタンダーにかかる精神的な負担こそが、応急手当を躊躇う原因であると考え、今後の普及活動においてはこの負担の軽減を目指した講習をすべきだと考えました。

まず第一に、市民が突然救命の現場に直面した時の心構えを養うことが必要です。講習の中で具体的なバイスタンダーCPRの事例を示し、応急手当をするときに感じる恐怖心や不安感を受講者が互いに意見交換できる時間を設けるなど、手技の説明に終始する講習の形式だけでなく、受講者の発言の場がある講習の開催が必要だと考えます。加えて、バイスタンダーとなった後の心のケアやサポートも積極的に行うべきだと思います。

第二に、応急手当の反復訓練を重ね、手技の経験を積むことが重要です。私の場合、普段の救急業務の中で何度も応急手当を繰り返していたからこそ動揺する気持ちと裏腹に行動す

ることができました。しかし応急手当に接する機会の少ない市民が、倒れている人を目の前にしたとき、「どうしていいかわからない」といった不安から応急手当を躊躇ってしまうことも大いに考えられます。市民が気軽に、そして何度でも応急手当に触れ合う機会を設け、考えるよりもまず体が動くようになれば、その不安を払拭できると考えます。

私が応急手当を行った数日後、男性が無事に社会復帰されたとご家族から伝えられました。名前も知らず、それまで一切関わることはなかったその男性の命が助かったことが、本当に嬉しかったことを覚えています。

あなたの隣にいる、名前も知らないその人も、誰かにとっての大切な人であるかもしれません。バイスタンダー育成とは、その大切な人を社会全体で一人でも多く救うことでもあるのです。すべての人々が不安や恐怖を乗り越え勇気ある1歩を踏み出すことができるよう、バイスタンダー育成に努めたいと思います。